

①裴松之『三国志注』に見られる史料批判の検討

早稲田大学大学院 袴田郁一

現在の史学思想研究において、魏晋から六朝期は史学史上の画期と見なされる。そのなかでも、六朝を代表する史注である裴松之『三国志注』は、その科学性・客観性を備える史料批判を含むことでとくに高く評価されてきた。近代歴史学に通ずる手法・精神を古代中国史学思想に見出そうとする中国史学研究固有の問題意識が背景にあるためである。ただ、そのような問題意識のため、先行研究では裴松之の史料批判のうちその科学性（近代歴史学との近似性）が殊更に強調される傾向がある。だが裴松之の史料批判は、必ずしも科学的・合理的であるばかりではなく、そもそも『三国志注』全体に対する史料批判の記事の割合はごく僅かにすぎない。その科学性にばかり注目することは、裴松之の方法論の全体像を見失わせる恐れがある。

本発表は、『三国志注』に残る裴松之の史料批判の全事例を概観するとともに、裴松之の先駆者である孫盛、及び裴松之の垂流とされる劉孝標『世説新語注』との比較によって、裴松之の史料批判の全体像と本質を考えることを目標にする。

②庾信「哀江南賦」における〈わたし〉について

文教大学 樋口泰裕

「哀江南賦」は、渡北後の庾信による自らが経験、見聞した梁王朝の繁栄から滅亡に至るまでの、彼にとっての過酷な現代史をめぐる表現の営みであり、一百六句からなる無韻の序文と、五百二十八句からなる有韻の賦本文によって構成され、また、賦本文は換韻から全五十段に分けられる。

従来、この作品は早くは正史本伝に伝記資料として引かれていることからもうかがえるように、自己の経験としての歴史もふくめ、その自叙性を顕著な特色として、或いは自明のこととして読まれてきたと言える。即ち〈わたし〉を語っている、そうした傾向が強いテキストということである。しかし、その様々にあらわれる〈わたし〉の語られ方は実のところ一様ではないのであって、従来の研究では、大上正美「庾信論覚え書き-「哀江南賦」并序」の読みへの一視角-（1998）が序文と賦本文とにおいてテキストの読み方に大きく関わる相違があることを指摘するが、本論はさらに賦本文においても、改めて序文とあわせて検討を要する問題があると考えられる。本発表の結論の一つを端的に言えば、賦本文第四十九・五十段の〈わたし〉は、それまでの〈わたし〉とは明らかにことなる〈わたし〉であると思うのである。

「哀江南賦」を語ろうとする庾信は自ら置かれている境遇へと連なる歴史（的経験）を〈解釈〉しないと、どうにもならない状況にあったのだと思う。もちろん、いかように足掻いてみたところで、歴史という時間は覆らず、それをまったく積みほぐし、ましてうけ入れることなど出来るはずがないとしても、言葉の力によって、つまりある意味軽やかに、そしてある意味重く、刹那的にでも試みようとしたのが「哀江南賦」という表現の営みなのであった。「哀江南賦」という表現の営みを通じて庾信が獲得した現実、彼なりの歴史（的経験）に対する〈解釈〉としての表現的意義を明らかにするというのが最終的に目論むところであり、本発表ではそのための序論となるべく卑見を述べ、広くご教示を請いたい。

### ③五世紀における詩歌観の変質——その淵源とその波及—— 大東文化大学 佐竹保子

『尚書』舜典、『毛詩』大序、『礼記』楽記等に見えるとおり、儒経の詩歌観は「詩言志」説であり、三世紀にジャンル論が展開すると、陸機「文賦」にいう「詩縁情」説が現れる。どちらも詩は心を詠うものとのテーゼだが、五世紀後半の『文心雕龍』には「自近代以来、文貴形似」（物色篇）「山水方滋」（明詩篇）と、「形似」の「山水」詠が「貴」ばれるようになったという。ではこの山水詠において、儒経詩歌観で前面に出ていた「志」「情」は、どう位置づけられているか。

山水詠の旗手である謝靈運の詩文には「理来情無存」、「情用賞為美、事味竟誰弁。観此遺物慮、一悟得所遣」、「遺情捨塵物、貞観丘壑美」、「故情居理上、……容納時之惑」とある。「情」は「理来」で「無存」となり、不「賞」で不「美」となり、「遺」すれば「一悟」「貞観」でき、「居理上」なら「惑」となる。この情認識は、謝靈運が「銘」や「誄」を捧げた慧遠、その「頓悟」説や「一闡提成仏」説に賛同した竺道生、慧遠の高弟の宗炳らと共通する。さらに竺道生、仏馱跋陀羅、鳩摩羅什らの漢訳仏典の情認識にも通底する。形似の山水詠は、四、五世紀の中国仏教学に淵源していると考えられる。

儒経の詩歌観は、日本の『古今集』真名序・仮名序にも波及するが、他方、『万葉集』の叙景句（山水詠）について、折口信夫氏は「叙景に徹せず、抒情に戻る表現上の不確実性を、或点まで截り放ったのは、漢詩からの黙会である」と評す。とはいえ一首全体が「叙景に徹」する傑作など、「漢詩」では王維五絶の「鹿柴」「辛夷塢」等ごく僅かだ。それはむしろ日本において、『千載佳句』『和漢朗詠集』型の鑑賞を経て、芭蕉や子規の作に結実したように見える。中国では、杜甫七律の名篇に典型的であるように、一首内で「詩言志・詩縁情」と「形似」とが鋭い緊張感をもって闘ぎ合っており、これらを予定調和的に「景情一致」「景情融合」とまとめる姿勢には、違和感を覚える。